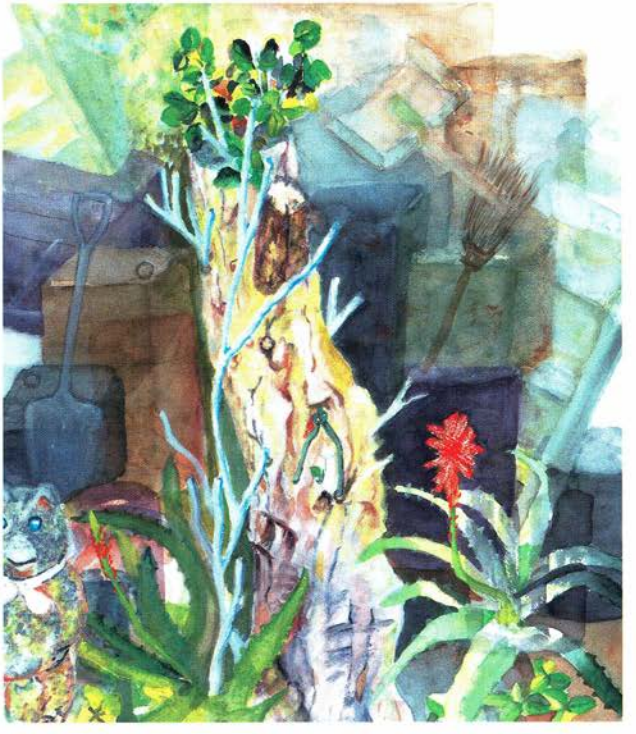
村野次郎創刊

香蘭



2021年(令和3年)5月号

第 98 巻　　第 5 号　　通巻 1085 号

二〇二一年(令和三年)五月一日発行(毎月一回一日発行)　香蘭　第九十八巻第五号

香　　蘭

2021年（令和３年）５月号
第98巻　第５号　通巻1085号

目　次

村野次郎作品　私の愛誦歌（69）……清水すえ子……表二
作品
一……2
二……24
三……32
推薦香蘭集……39
香蘭集……40
作品一特選（三月号）…伊藤（美）・伊藤（康）・大井田・柏原（義）・柏原（恵）・城・鈴木（桂）・中村（か）・西野・本田・満木……16
作品二・三特選（三月号）…阿部・小原・小林（ま）・庄司・田淵・中井・平川・山下・丑山・河野・中村（陽）・能城・渡邉（典）……18
村野次郎への旅（133）……千々和久幸……20
歌の生まれる場所（100・最終回）……香山静子……22
エッセイ・自由研究　川野里子歌集『歓待』……伊藤康子……44
エッセイ・自由研究　万葉集「宮廷歌人の恋と歌」その二……近藤純……46
私の読む現代短歌（7）「インテリゲンチア」柴生田稔……田中あさひ……50
焦点（三月号）人の表情の見える歌……渡辺礼比子……52
作品評（三月号）
作品一……和田羊子……54
作品二……丸山三枝子……56
作品三……江口絹代……58
香蘭集……小林ますみ……56
文法あれこれ（24）……田中あさひ……62
緑地帯……西野・伊藤（輝）・松沢……64
七首抄（三月号）……宮原・大島（昌）・丑山・関口（洋）……67
歌集管見『宮本永子歌集―現代短歌文庫』評……丸山三枝子……70
池田はるみ歌集『亀さんゐない』評……桜井京子……71
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向……72
歌会及び会合・会員消息・他……77
編集後記・新宿日記……80・表三
表紙絵……中村陽子「おしゃべりな木」　目次・緑地帯カット……和田和雄

村野次郎作品　私の愛誦歌（69）

父のたまこの火にのりて来ませよと
夕の門にをがらを焚くも

『夕あかり』

清水すえ子

盂蘭盆の初日の夕方、祖先の精霊を迎えるために門口でおがらを焚く迎え火。

私達の所と同じ風習のある事が嬉しく、また若くして急死されたお父様への深い思いが歌の中に込められており、かがんでお子様とおがらを焚く姿が見えるようです。

心惹かれる多くの歌の中から選ぶのに迷いに迷いましたが、この歌に出会うと、何の説明もいらないこの歌に決める事にしました。

素封家にお生まれの村野先生は、私なぞには計り知れない時代と人生を生きられた人である事を知る事が出来ました。

私事でありますが、母が早世ゆえ、父は末の子の私を殊の外、かわいがってくれました。それゆえ、父の亡きのち、門口で迎え火を焚きながら、「父さん、この火を見て迷わずにご先祖様を連れて来てね」と思いながら火を焚いたものです。

この歌の中に、私と同じ思いを感じ、その他の歌には目をつむる事にしました。

（『夕あかり』92頁に掲載。『村野次郎三百首』には収録されていない）

四選者の作品

回送電車

平塚　千々和　久幸

花束を抱え雨中を走りくる男ありにきわが青春に
忘れものしてきたような青春の駅を回送電車通過す
モノクロームの街を沈黙せしままに空っぽの電車が走り過ぎたり
花束も泥濘もなき風の街捨てたるものは地に朽ちてあれ
見残しし夢の続きは見そびれて明け方遠き霧笛を聞けり
野の汗のにじめるシャツを熱湯に沈めて低く父の名を呼ぶ
古き殻負う一人にか無人駅に汽車を待ちおりあばよ青春
劇中劇のままに過ぎにし青春をちぎれゆきたるフィルムに繋ぐ

とうに忘れて

東京　桜井　京子

蓑虫は蓑をまとひて風のなかこのままずつと鬼でもいいか
都合よく便利に使はれゐることに気づいて今日は蓑虫になる
暮れ方のあかねの雲を見て帰る永遠なんてとうに忘れて
大雪が降つてゐるなり東京ではない街角のこの世のどこか
上気してわれの手紙を読む人のゐる気分なり虹の向かうに
水中の足掻きは見せずゆつくりと横切つてゆくつがひの鴨が
きのふより拗ねて怒つてゐるやうな柊南天小花をこぼす
冬の海みて来し花夏の見る夢はお水がいつぱいキラキラとせり

蝋梅

横浜　渡辺　礼比子

シャッターを鎖せるままなり塵取りを買わんと来たる日暮商店
気まかせに埠頭の端まで来たりしが今日こそ是非を決めねばならぬ
谷戸の梅ぱおっと紅きこの夕べ寒中見舞いの一枚戻る
わが歌にあらざるごとし易々とパソコン文字の綴れる「躑躅」
窓の外は風止みぬらし惧れいし電話かからず一夜明けたり
段に散る蝋梅ひとつ掌に載せぬ　いつの日われは海に果てんか
壁隔ておのもおのもにCDを聴きいしが夜は囲む土手鍋
雑木木のかたえ炎の這うごとし春の夕日の沈まんとして

ほら近くまで

鎌倉　香山　静子

コロナ禍の風吹き荒るるこの街を行きつつ思ふ故郷の人を
きらきらと冬の陽の差す水の面に鴨は降り立つ波紋曳きつつ
時折は水音たてて池に住む緋鯉が跳ねる真鯉が跳ねる
久々に一日テレビを観てゐしがむしろ疲れる生あくび出て
良き歌が出来ぬと言へば良き歌とはどんな歌かと問ひ返される
今宵はもう終りにしようもみぢ葉を挟んで歌集のページを閉ぢる
久々の雨に囲まれ思ひをり是迄のこと是よりのこと
寒いさむいと首竦めたる二月過ぎ春は来てゐるほら近くまで

作品一特選

（三月号作品から）　桜井京子　選

あと一つなり　川崎伊藤美恵子

猫の餌を買いに行きたるスーパーに亀のおやつというものも見る
左膝の今朝は痛むもさてはきのう自転車もろとも転びしゆえか
日々を鳴る夕べのチャイムが「この道」に変われば日暮がぐんと早まる
仏壇の上の遺影の置き場所はあと一つなり早い者勝ち
過去は前、未来は後ろにあると言いピカソ九十一歳まで生きて
ていねいに加湿器洗いてしまいしがあっけなく季節は巡り来たりぬ

・三、五、六首目、人智を越えた時間の不可思議を捉えている。

本人　東京伊藤康子

氏名生年月日を聞かるる電話口ご本人様確認の為と
ああやっと本人確認されたゆえネットでみかんを注文したり
そのうちに本人確認から零れ落ち誰でもなくなる時が来るかも
なりかわる誰かが私を生きるなら迷わずスーツとアメンボになる
職場との往復のみで暮らしおり自粛の前と何も変わらず

・私とは誰かという永遠の問いを問い続けている。

山茶花　川崎大井田啓子

庭先の薄くれなゐの山茶花は紅乙女とふ遠き名を持つ
うすき紅さしたる蕾が犇めけり咲いてごらんよ一つ残らず
うす紅のささんか咲きぬ思ひ出の小径へ続く入口として
花盛る紅乙女の小き一本を買ひ求めしは夫でありき
今朝不意にピラカンサとふ名思ひ出す空がこんなに晴れてゐるから
ピラカンサのそばに山茶花咲きあふれ団地への径に人影のなし

・実景の向こう側に甘やかな記憶を彷彿とさせる。

〈次〉の文字　尾道柏原義清

ゆくりなく村野四郎を辞書に見つ我の期待は〈次〉の文字なり
気がつけば難聴われは歌会に迷惑がられて声高になる
左にてけんけんすれば三度跳びさあ右足と変えれば跳べず
コロナにて帰れないとの知らせあり届けるミカンの箱が増えたり
辞書を引き「由緒」確かめその次の由井正雪もついでに読みぬ

・肉体は老いてゆくが、いよいよ好奇心は旺盛である。

有情無情　尾道柏原恵

清きままやがて散り敷くさざん花のいずれも同じ庭に静もる
大局を見る言葉さえままならぬ総理はコロナに翻弄さるる
木の音と風の音とが交じり合う師走に硝子を磨きておれば
青空を貫かんばかり冬の野の風に研がるる鉄塔ひかる
待ち人を待つとうことは遥かなり遠い昔が声かけてくる

・三首目のリリカルな把握、四首目は確かな描写で捉え方が鋭い。

コロナの関所　豊中城　富貴美

膝ポンと叩ける歌を詠めと言ふ良き音に打てるその手ぞほしき
鉢植ゑを被ふビニールが乾きたる風に煽られ鳴るビブラート
消毒の霧を吹きつけ額にピッーされて記名すコロナの関所
冬の日のやはく射し入る竹林を一人マスクもつけずに歩む
吹かれては転べる枯葉追ひながら歩かむがため日暮をあゆむ

・発想の向日性が退屈な日常に彩りを与えている。

十二月　西宮　鈴木桂子

ベランダに雀を呼びて日を暮らす友より届く月2の便り
ロッテリアにてたびたび遇ひし昼休みホットチョコ飲む平野謙氏に
「気を付けて、おかんはすぐに切れるから」職場に向かふわれに息子は
汗ばめる肌に冷たき月光のさす夜を帰る仕事を終へて
夕暮れてアベリアにほふ咲きつぎてまた咲きつぎて師走の街に

・現役で働き続けることの充足感が歌に弾みをもたらしている。

ジョロウグモ　福岡　中村かよ子

糸先は風の行方かジョロウグモその目はほとんど見えぬというに
一年を生きて巣を張るジョロウグモ別れの合図の北風が吹く
夕焼けに金糸の粉の降るごときジョロウグモの巣の崩れてゆきぬ
信じたいものしか見ない人の目が不安の形を捜しはじめる
夕暮れてねぐらに帰る椋鳥の群れにも人は不安を映す

・四首目、偏った思考に陥る愚かしさ。ジョロウグモも生きねばならぬ。

いつぽんの木　東京　西野美智代

いつぽんの木として倅の前に立ち朽ちゆくまでを夫は見せたり
選ばれて珠算大会に出し指がセロファンテープに梃摺つてゐる
一一八回の虚偽答弁を抜け抜けと総理がするを許したる国
町会の茶飲み話に新後家と呼ばれゐるのはわれのことらし
十分とずれること無し隣人が午後三時には雨戸を下ろす

・四首目、カリカチュアの奥に人間の真実を見据える目がある。

終活　長崎　本田民子

折々の花を咲かせて五十年花壇も終活と思うこのごろ
カットされ店頭に並ぶ渡り蟹バーレーン産とは恐れ入りたり
姉二人も妹も持つ補聴器をお買いなさいと耳がささやく
町川に少年のような白鷺がじっと未来を見つめていたり
HTB（ハウステンボス）にカジノは要らぬとう署名私の名前をしっかりと書く

・ウイットがあり終活などと言いながら持ち前の好奇心は健在。

球根　川越　満木好美

あの頃は楽しかったと思いつつ再放送の「冬ソナ」見ている
耳と目はつながりおれば眼鏡屋に補聴器あるを諾いており
球根の埋まりし鉢をビニールの温室に移すわが子のように
ベランダに見える秩父の稜線が常より近い冬晴れの朝
マスクして食事するなど出来ぬから家にて食べる夫の顔見て

・歌集『黄金家族』のその後の暮らしぶりが見える。

作品二、三特選

（三月号作品から）　香山静子選

〈作品二〉

母逝く　藤沢阿部容子

二十年続けし介護が唐突に終りになりぬ母の逝きたり
この歳でも母を亡くして孤児（みなしご）になりたる気持　姉弟あれども
葬儀終えうつろに喪中はがき書き母の死この世に確定される
重症者が減りましたとは回復にあらず死亡者となりし意味かも

・哀しみの中にも冷静さを保っている。

探るごとくに　鎌倉小原裕光

ルーベンスの〈麦わら帽子の女性〉の目は描く作者を探るごとくに
美容院の鏡の奥まで並ぶ椅子コロナ恐れるか客一人なく
ハロウィンのカボチャの顔が嗤ってる出入り少なきデパートの前
園児乗せバス発ち行きて現われぬ病院行きを待つ老いの列

・確かな洞察力の奥に温もりを感じる。

石榴　尾道小林ますみ

絵に描くと畑に石榴を採りに行く九十八歳いまだ現役
晩秋の島山に立つ鉄塔はときに煌めき青空の中
小春日の寺山に見る瀬戸内海どこもかしこもキラキラ光る
早朝の夫の言葉に腹立ちて今日一日を喋らず過ごす
姪よりのみかん着いたという知らせ夫との会話弾み始めつ

・遠慮がなく睦まじい夫婦の姿が見える。

ごくろうさん　横浜庄司健造

朝明けの枝をたわめてハシブトはおそるおそる熟柿によりゆく
菅総理連夜の会食ごくろうさんハシビロコウは今日も動かず
街路樹に群れて飛びこむムクドリの声ふくらみてネオンが灯る
ひさかたの冬日あまねし木蓮の小さな花芽は銀鼠に照る

・鳥への愛情が滲み出ている。

張子の虎　倉敷田淵宏之

梢には張子の虎がつるされてゆらりゆらゆら師走の風に
冬枯れの桃の畑に一匹の猫が身構え梢を見あぐ
吹く風に自在に揺るる張子の虎その都度猫は身がまえ直す
夏の日の鴉除けなる虎張子に進退窮まる野良猫の冬

・張子の虎への限りない愛着が感じられる。

兎ならねど　宇治中井房江

晩秋の北山あたりのしぐれ虹二重にかかるをスマホが見する

濡れ鼠の塊何と触れしかば小すずめひしと飛び立ちゆけり
種まきて育てし野菜さまざまを日ごと食べおり兎ならねど
陽を浴びて輝く桃山団地群五十三棟Aをめざせり

・日常が生きいきと詠まれている。

母　　愛媛　平川良枝

自が足で歩くを夢見ることもなくただただ眠るが母の欲望
安住の場を見つけたかに見える母リハビリ続きに退屈もせず
母見舞うマスクの吾を違わずに眼合わせて名を呼びくれぬ

・母を思う気持ちが読者の胸にも伝わって来る。

日本酒　　横浜　山下紘正

妻や父母はわが内のみに生きをりて我の死をもちて墓仕舞ひとす
例年の京都への旅を取り止めて京懐石を味はふとする
京懐石椀鉢皿とひとつひとつ目で楽しみて舌で味はふ
上品な京懐石の静けさに「古都千年」の日本酒を飲む

・日本酒を飲みながらも淋しさが滲み出ている。

〈作品三〉

ミモザの蕾　　さいたま　丑山眞弓

『残念な生き物図鑑』に載らぬようしっかりせねば今の人類
一日でアトランティスは消えたとかあっても不思議のないことだけど
エレベーターのテープ張られた立ち位置は四人で満員優雅に乗りぬ

・事象を借り物ならぬ自分の目で捉えている。

悲しみの色　　鎌倉　河野慎二

カンバスに映しぬ澄みたる悲しみの色を凪ぎたる真冬の海を
人影の乏しき枯野へ舞ひ戻り空に詩を書くわがリ・スタート
言の葉の操り難きを定型の檻に押し込む獣のやうに

・この個性を失わないように。

枯れ葉　　東京　中村陽子

本当と言われるほどに胡散臭い庭の落葉を蹴散らしてみる
自然界はグラデーションでできていてゆっくりだって変わってゆける
それぞれの先に向かって急ぎつつ同じ方向に車は走る

・事象の変化を鋭く捉えている。

中共とは　　三鷹　能城春美

中共がウイグル人を収容し今日も命じる強制労働
無給にてウイグル人が縫わされた服を安いと若者が買う
中共は収容所のウイグル人の内臓高値で売っているとぞ

・しっかりと自分の眼で世界を俯瞰している。

初冬のひかり　　鎌倉　渡邉典子

紅葉せる黄櫨の一期のかがやきをおきざりにして早き入り日は
篁に初冬のひかりあそぶ日の時間はさやさやわれを行き過ぐ
伐られたる銀杏の異形の灯されて街路を風が急ぎゆくのみ

・作者自身の言葉で的確に詠まれている。

村野次郎への旅（133）

「香蘭」創刊まで

千々和　久幸

本稿はこれまでに「わが青春の村野次郎」（1957年、昭32～1961年、昭36）から筆を起こし「ザムボア（朱欒）」「地上巡禮」まで書き継いできたが、このあとは創生期の「香蘭」を読むことにする。

編集部の書架に「香蘭」は1925年（大正14）の合本から揃っているが、それ以前の創刊前後の合本はない。

幸い創刊号は復刻版を所持しているのでそこから読んでいくことにするが、その前にこれまでの村野次郎の足取りを星野丑三の『周辺の歌人像』によってお復習（さらい）しておこう。

①「朱欒」第一次　明治四十四年十一月より大正二年五月（全十二冊）
村野染次郎にて盛んに投稿

②『地上巡礼』（巡礼詩社）　大正三年九月より同五年十一月

③アルス（阿蘭陀書房）　大正四年四月より同年十月（全七冊）

④『烟草の花』（巡礼詩社改め紫烟草舎）
大正五年十一月より同年十二月（全二冊）

⑤『曼陀羅』（曼陀羅舎）　大正六年九月より同年十二月（全四冊）

⑥「朱欒」第二次（曼陀羅舎改め紫烟草舎）
大正七年一月より同年六月

このあと星野は「香蘭」創刊に至る経緯を同書でこう述べている。

次郎の拠って来た歌誌が、右表のごとく次々変転した理由は、たとえ単純には即断出来ぬにせよ、その主たる原因は、その師白秋の汲めども尽きぬ詩情の泉が、短歌のみでは盛り切れなかったところにある様に思えてならない。

まして、大正七年六月第二次「朱欒」誌上に声明し、短歌以外の他の創作活動に専念するとして、白秋より師弟の関係を断たれた次郎ら社中の歌仲間の動揺は想像を絶したことであろう。茫然自失、さながら纜を切られて大海を漂う小舟となって放り出された。僅か半年許り前、白秋より「推讃の辞」を以て歌壇に推薦され、油の乗った次郎と慎吾は相謀り、大正八年「秦皮詩社」を結成して「とねりこ」を発刊した。しかし事志と違い、やがて次郎は大正十一年末に中河与一らを同志として、淀橋町角筈九二に「香蘭詩社」を結成、翌大正十二年三月「香蘭」を創刊するに至った。

『周辺の歌人像』

この経緯は村野次郎「香蘭創刊前後」（『次郎歌話上』）に詳しい。この個所は他のエッセイですでに引いたが、煩を厭わずいま一度読んでおこう。原文のまま引く。

前期ザンボア時代（北原白秋主宰）中学生の私は白秋個人を知る由もなく、ただ文学的憧れを持ちはじめた私に友人が借してくれたのが数冊の「ザンボア」であった。この雑誌のもつ新鮮極まりない詩的雰囲気に私は完全

に魅了されてしまったのであった。そこには当時の著名な文学者が寄稿者としてずらりと並んでいて私などの近づけるものではなかった。しかし、号を追う中、雑誌の後部に一般投稿家の詩歌欄が設けられ、ここに友人にすすめられ出詠したのが私の投書のはじまりである。この誌の主宰者白秋はまだ三十歳前後の青年であった頃のことである。

この「ザンボア」はやがて廃刊された。

白秋はこの「ザンボア」の投書家の詩歌欄を主体として巡礼詩社を結成することになり、私はその入会勧誘状を三浦三崎から受け取った。しかし結社といっても名目だけで機関誌はなく、白秋は三崎から小笠原へ、小笠原から麻布坂下町と移った。ここでようやく白秋主宰の最初の結社誌「地上巡礼」が誕生した。大正三年九月のことである。（中略）

地上巡礼創刊号社報に「私は少なくとも本誌をして日本詩体最高の権威あるものにしたい考えである」という意気込みで発足したこの歌誌も数ヵ月後にすでに廃刊となっていた。葛飾に移住した白秋は大正五年次の歌誌「烟草の花」を発行した。そして社友は以前のものから引きつがれたものであった。しかしこの歌誌も数ヵ月以上続かなかった。

大正六年、白秋は方向をかえて門下の人々に歌誌「曼陀羅」を発行させた。しかし自身主宰する歌誌でさえ永続しないのであったから、門下の発行する歌誌が気に入る筈がなかった。そしてこの「曼陀羅」も四号の短命で終った。

この次に発行されたのが後期の「ザンボア」である。この機関誌は河野慎吾、村野次郎両名の協力によって発行され顧問北原白秋後援の形でスタートした。そして今度こそは順調に運ぶかに見えた。しかしそのうち白秋は顧問としての辞意を表明し、自身が考えた「ザンボア」の名義使用は禁止するなどの強圧に遭遇してこのザンボアもあえなく壊滅してしまった。

以上によっても知られるように当時の白秋の詩人的瘤強い旋風の前に門人等はいつも木の葉の如く吹き飛ばされていたのである。

「香蘭創刊前後（その一）

次郎の「香蘭創刊前後」は（その一）「香蘭」昭和四十一年一月号から（その六）同六月号まで書き継がれているが、以下は本稿の叙述にに必要な個所のみを抜き書きする。

肝腎の「香蘭」命名の由来は落とせないのだが、この件については村野次郎、中川与一両名が記憶にないと言っている。不思議な話だが、あるいはお互いに譲り合ってのことかも知れない。命名の由来の個所を引く。

この名称が当時のわれわれに最もふさわしいものとして採用し歌誌名として使用したのは村野次郎であることに違いはない。

当時のわれわれの短歌に対する理想は匂い高く気品のある作品でなければならぬとしていた。この理想は北原白秋が文学に対して常に堅持していた理想で、その流れをくむ人々の間には自然とこの理想が動かしがたいものとなっていたのである。（中略）

そして香蘭を発刊するに当っても、この理想の象徴として香蘭という名称となって現れたことも納得できるのである。（中略）

香蘭はその発足に当って華々しい言葉はなかったけれども、人々の心の中にはただ真面目に作歌を修業する場がほしいという一念のみがあった。

香蘭創刊前後（その六）